

DataCloset-Plus 操作マニュアル – インストール編



本マニュアルには、しおり(目次)が用意されています。

自動で表示されない場合は、PDF 画面のしおりボタンを押してください。

DataCloset-Plus は、以下の手順でインストールします。

- ① CD(もしくはダウンロード)で提供されたインストールファイルを解凍する
- ② DLL ファイルを複写する
- ③ INI ファイルを設定する
- ④ デモデータで確認する
- ⑤ データベースへ接続する

「④ デモデータで確認する」においては、Pervasive が実行環境にインストールされている必要があります。

Pervasive がインストールされていない場合は、この作業はスキップしてください。

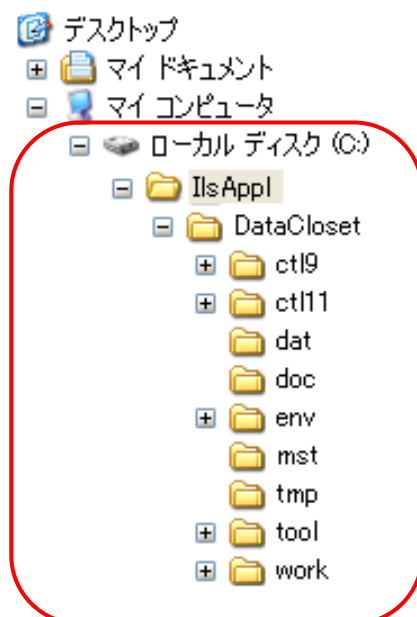
1 インストールの手順

1.1 インストールファイルを解凍する

CD で提供された(もしくはダウンロードした)圧縮ファイルを解凍します。

※標準で提供される ini ファイルでは、インストールフォルダは「C : ¥ |IsAppl」フォルダに指定されています。インストールフォルダを変更する場合は、ini ファイルの変更が必要です。デモやお試し版での使用時には、そのまま使用されることをお勧めします。

【標準のフォルダ構成】



【標準フォルダの説明】

ctl9	dbMAGIC V9 用のコントロールファイルが保存されています。
ctl11	uniPaaS のコントロールファイルが保存されています。
Dat	Pervasive のワークデータが保存されます。 ※デモ用のデータも保存されています。
Doc	操作マニュアルが保存されています。
Env	ini ファイルや環境ファイル(色、アクション、など)が保存されています。
Mst	Pervasive のシステムファイルが保存されます。
Tmp	開発版で実行した時のみ、自動生成された SQL が保存されます。
Tool	GUDF や MGTOOLS の DLL が保存されています。
Work	標準の指定の場合の、ユーザ毎のワークフォルダが作成されるフォルダです。

1.2 DLL ファイルを複写する

¥DataCloset¥env フォルダに保存されている以下の3つのファイルを、dbMAGIC/uniPaaSの実行フォルダに複写します。

GUDF.DLL

GUDF.MUD

MGTOOLS.DLL

1.3 INI ファイルを設定する

ini ファイルは、¥DataCloset¥env フォルダに保存されています。

DC9. ini	dbMAGIC V9 版の実行用
DC9_dev. ini	dbMAGIC V9 版の開発用
SM9. ini	dbMAGIC V9 版のインターフェーステスト用
DC11. ini	uniPaaS 版の実行用
DC11_dev. ini	uniPaaS 版の開発用
SM11. ini	uniPaaS 版のインターフェーステスト用

帳票のオーナー名を指定する

帳票のヘッダに出力するオーナー名を指定します。表示／非表示はパターンオプションで指定できます。

/Owner = [オーナー名]

システムデータの保存先を指定する

システムファイルとは、ユーザ情報、DB 情報、パターンなどのマスタ情報のことを指します。ここでは、システムデータを保存する DBMS の情報を指定します。システムファイルの保存先は、抽出対象の DBMS に関係なく、自由に指定することができます。(例えば、抽出対象データは Oracle だけど、システムファイルは Pervasive に保存する、など)

/[MAGIC_DATABASES]DCSYS = [システムデータの保存先 DBMS の情報]

ワークデータの保存先を指定する

DataCloset は、抽出したデータをワークファイルに一時保存します。このワークファイルは抽出対象と同じ DBMS でなければなりませんが、場所(スキーマ)は異なっても構いません。従って、この指定は、抽出対象となる全ての DBMS に対して設定する必要があります。

※運用、保守を考えると、抽出対象のデータとは違う場所(スキーマ)に設定することをお勧めします。

/[MAGIC_DATABASES]DC_PV = [ワークデータの保存先 DBMS の情報-Pervasive 用]

/[MAGIC_DATABASES]DC_OR = [ワークデータの保存先 DBMS の情報-Oracle 用]

/[MAGIC_DATABASES]DC_MS = [ワークデータの保存先 DBMS の情報-SQL Server 用]

ワークデータの保存先への接続情報を指定する

(Oracle)

/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC_OR_USER = [ユーザ ID]

```

/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC_OR_PASS = [パスワード]
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC_OR_SID = [接続文字列]
(SQL Server)
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC_MS_DB = [データベース名]
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC_MS_SERVER = [サーバー名]

```

起動モードを指定する

アプリケーションの起動モードを指定します。

R:実行モード・・・起動時にログイン画面が表示され、ログイン後に実行メニューが表示されます。

D:開発モード・・・起動時にログイン画面は表示されず、管理者としてログインします。このモードで抽出処理を実行すると、自動作成された SQL が TMP フォルダに出力されます。出力された SQL は、結合条件などの設定の確認に利用することができます。

B:コンポーネントモード・・・コンポーネントとして利用する場合に指定します。起動時にログイン画面が表示されない他、メニュー編集などの一部の機能が制限されます。

```
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCMODE = [R/D/B]
```

抽出後の EXCEL 起動オプションの初期値を指定する

```
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCExcel = [0:起動する/1:起動しない]
```

実行メニューでの印刷の可否を指定する

実行メニューから起動した時に、印刷ボタンを有効にするか、無効にするかを指定します。

```
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCREPOK = [0:起動する/1:起動しない]
```

フォルダの論理名を指定する

```

/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DC = C:\¥¥\IlsApp\¥¥DataCloset //ホームフォルダ
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCCTL = %DC%\¥¥CTL9 //プログラム
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCENV = %DC%\¥¥ENV //環境ファイル
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCDOC = %DC%\¥¥DOC //操作マニュアル
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCMST = %DC%\¥¥MST //Pervasive のマスタ
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCDAT = %DC%\¥¥DAT //Pervasive のデータ
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCTMP = %DC%\¥¥TMP //SQL の保存
/[MAGIC_LOGICAL_NAMES]DCWORK = %DC%\¥¥WORK //ユーザ別ワークフォルダの親フォルダ

```

1.4 デモデータで起動してみる

この作業を行うにあたっては、Pervasive が実行環境にインストールされている必要があります。Pervasive がインストールされていない場合は、この作業はスキップしてください。

- ① dbMAGIC/uniPaaS の起動アイコンのプロパティで、該当バージョンの INI ファイルの指定を追加する。

dbMAGIC V9 の場合・・・dc9.ini

uniPaaS の場合・・・dc11.ini

例)

“C:\¥¥Program Files¥¥Magic¥¥DeveloperPlus¥¥MGgenw.exe” @c:\¥¥IlsApp\¥¥DataCloset¥¥env¥¥dc9.ini

- ② 起動アイコンより実行する。ログイン画面が表示されたら、

USERID=「SUPER」

Password= なし

でログインする。

- ③ メニューが表示されたら<Exit>を押して、システムを終了する。

2 データベースへ接続する

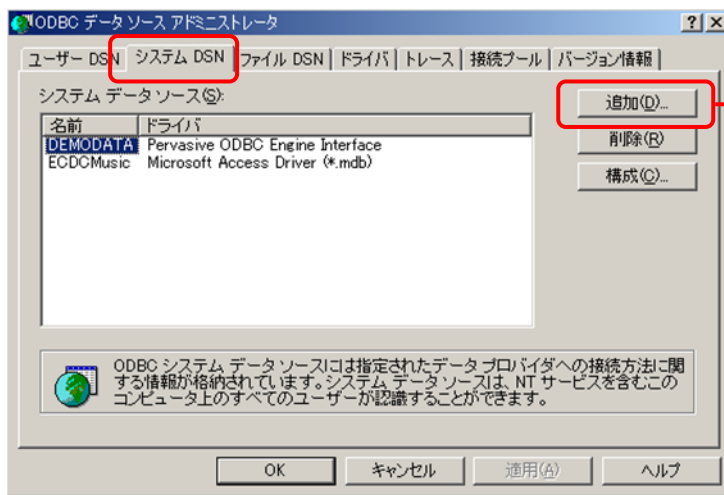
本マニュアルでは、Pervasive のデモデータの ODBC 接続設定の手順を説明します。

Oracle や SQL Server の設定方法に関しては、既存システムのマニュアルを参照ください。

※データベースへの接続方法は、使用環境によって異なりますので、ご利用の環境に合わせて設定してください。

2.1 Pervasive の ODBC を設定する

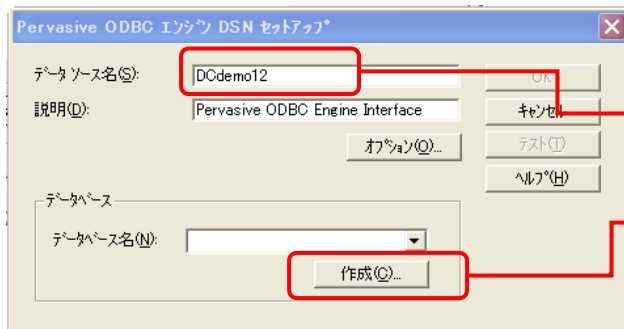
① 「コントロールパネル」の「管理ツール」-「データソース(ODBC)」で、「ODBC データソースアドミニストレータ」を起動します。



② 「システム DSN」タブで「追加ボタン」を押します。

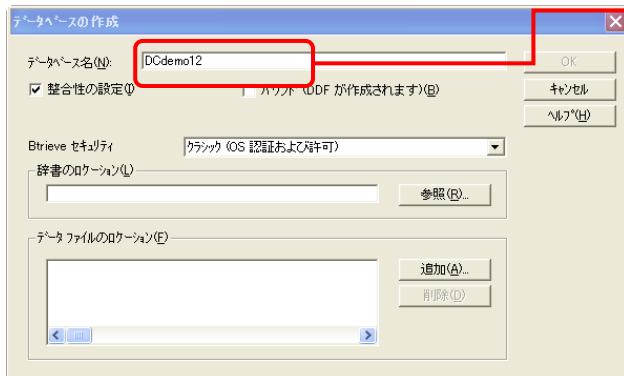


③ 「Pervasive ODBC Engine Interface」を選択します。

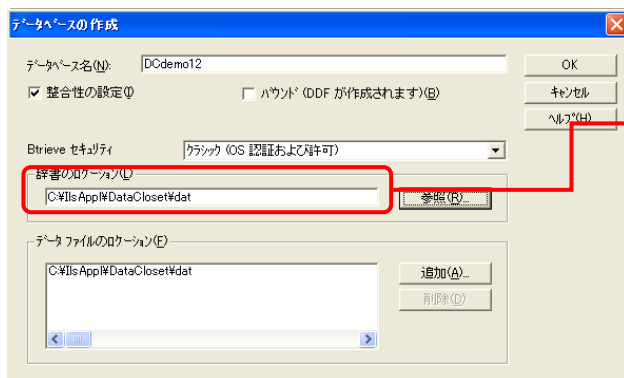


④ データソース名を入力します。
※デモデータは、「DCdemo11」です。

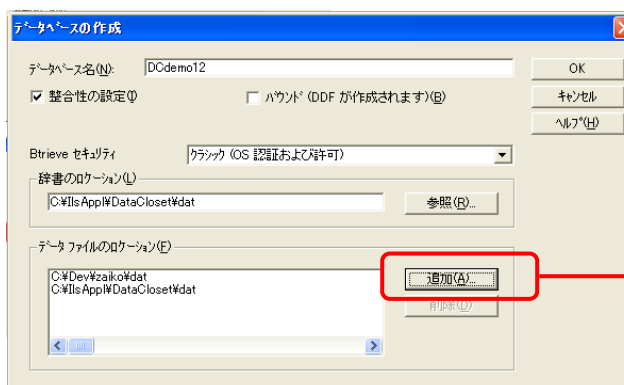
⑤ 作成ボタンを押します。



⑥ データベース名を入力します。



⑦ 辞書のロケーション (DDF ファイルの保存先) を指定します。



⑧ 必要に応じてデータファイルのロケーションを指定します。

注意:
INI ファイルの論理名「DC.PV」で指定されているフォルダは必ず指定してください。

データベースの保存フォルダが変更された場合

- ① 「ODBC データソースアドミニストレータ」画面の「システム DSN」タブより、該当のデータソースを選択し、「構成」ボタンを押します。
- ② 「システム DSN 設定」画面の「作成」ボタンを押し、新しいデータベースを登録します。
- ③ 「システム DSN 設定」画面に戻り、「データベース名」に新しく作成したデータベース名を指定します。

2.2 Pervasive の DDF を作成する

DDF とは、ODBC 経由でデータベースに接続するときに必要な情報が格納されているファイルです。

(前準備)

DDF を作成する前に、テーブルリポジトリの項目名を見直す必要があります。Pervasive.SQL では、ファイル名、列名(項目名)に制限があり、これに違反すると SQL の実行結果は保証されません。

項目名は、全角文字、半角英数文字、及び、アンダースコア('_')で構成される20桁以内の文字列である必要があります。これに違反する場合は、項目名を変更してください。(例:分類(1) → 分類_1)

※ここでは、dbMAGIC の DDF 作成機能を使用します。uniPaaS の場合は、購入元に別途ご相談ください。

- ① dbMAGIC の作業フォルダ内の以下のファイルを削除します。

FIELD.DDF, FIELDEXT.DDF, FILE.DDF, INDEX.DDF

- ② 対象のアプリケーションを開発版で起動します。
- ③ テーブルリポジトリを開いて、対象のファイルにカーソルを移動します。
- ④ 「O:オプション」→「D:DDF 作成」 (もしくは Ctrl+D)を実行します。
- ⑤ ④の処理を該当する全てのテーブルに対して行います。
- ⑥ DataCloset-Plus の V9 開発版を起動し、テーブルリポジトリを開きます。
- ⑦ テーブル番号1～3(PV 結果 100、PV 結果 50、PV 結果 30)のDDFを上記④の要領で作成します。

DbMAGIC の作業フォルダに作成された DDF ファイル(FIELD.DDF, FIELDEXT.DDF, FILE.DDF, INDEX.DDF)を、ODBC の辞書のロケーションに指定したフォルダにコピーします。